

2025.12.07.

「ヨハネの誕生」

旧約 創世記 21章1節～8節

新約 ルカによる福音書 1章57～80節

1. はじめに

アドベント第二週に入りました。今朝与えられた御言葉は洗礼者ヨハネが誕生した時のことが記されています。4つの福音書は全て洗礼者ヨハネに関する記述から始まっています。イエス様が公の活動される前に、洗礼者ヨハネの活動がありました。実際、イエス様は洗礼者ヨハネから洗礼をお受けになりました。私共はイエス様が救い主であることを知っておりますから、洗礼者ヨハネについてはそれほど注意を払わないところがあるかもしれませんけれど、福音書は洗礼者ヨハネの登場ということがとても大切なことで、決して無視してはいけない事柄として記しています。どうしてでしょうか？それは、イエス様の誕生、救い主イエス様の到来という出来事が、この洗礼者ヨハネの活動によって、たまたま、偶然この時に起きたという事ではなくて、神様の長いご計画の果てに与えられた出来事であることが示されたからです。洗礼者ヨハネの活動は、全ユダヤを巻き込む、大宗教運動として展開されました。洗礼者ヨハネ以前、最後の預言者であったマラキ以来、約300年間にわたって預言者は現れませんでした。人々は、洗礼者ヨハネの登場に熱狂しました。洗礼者ヨハネが預言者であることは多くのユダヤ人が受け入れ、信じておりました。そのヨハネは、キリストであるイエス様の到来を告げる者、イエス様によって成就される救いの先駆け、旧約において預言されていた救い主の道備えをする者であることを告げることによって、イエス様がまことの救い主であることを福音書は告げているわけです。

2. 洗礼者ヨハネの誕生までの経緯

ここで、洗礼者ヨハネが誕生するまでの経緯（いきさつ）をざっと見ておきましょう。ルカによる福音書1章5節以下に記されております。ヨハネの父ザカリアは祭司でした。妻のエリザベトもアロン家の娘でしたので祭司の家系です。しかし、二人には子どもがおりませんでした。そして、二人とも既に年を取っていました。何歳だったのかは分かりません。60歳代と考えて良いかと思います。ザカリアは祭司の務めをするために、聖所に入って香を焚くことになりました。当時、ユダヤでは1万人を超える祭司達が24の組に分かれ、交代で神殿でのご用に仕えておりました。一つの組に何百人の祭司がおり、その中で聖所に入って香を焚くというのは、一世一代のご用に当たるときであり、ザカリアは相当緊張していたことでしょう。その聖所でご用に当たっている時、天使ガブリエルがザカリアに現れて、こう告げたのです。「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリザベトは男の子を産む。その子をヨハネと名付けなさい。

1:14 その子はあなたにとって喜びとなり、楽しみとなる。多くの人もその誕生を喜ぶ。 1:15 彼は主の御前に偉大な人になり、ぶどう酒や強い酒を飲まず、既に母の胎にいるときから聖霊に満たされていて、 1:16 イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。 1:17 彼はエリヤの靈と力で主に先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に正しい人の分別を持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」今日はこの天使の言葉を丁寧に見ていくいとまはありませんけれど、要するに、「あなたの妻エリザベトは子どもを産む。その子の名をヨハネと名付けなさい。その子はイスラエルを主のもとに立ち帰らせる。準備の出来た民を主のために用意する。」と告げたわけです。この時、ザカリヤは「わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」と言って、天使の言葉を信じて受け入れることが出来ませんでした。その結果、天使はザカリアの口をきけないようにされます。ザカリヤは勤めが終わって家に戻ります。そして、エリザベツは身ごもつたのです。

ちなみに、この時天使ガブリエルは「恐れることはない。ザカリア、あなたの願いは聞き入れられた。あなたの妻エリザベトは男の子を産む。」と告げました。ということは、子が与えられるようにというのは、彼ら夫婦の祈りだったということでしょう。しかし、結婚して5年、10年、20年と過ぎていくうちに、彼らは若い日に「子が与えられるように」と祈ったことさえ、忘れてしまったのではないでしょう。しかし、神様はお忘れにはなっていなかったということです。私共は忘れてしまします。しかし、神様は忘れません。また、ザカリヤは祭司でしたから、「神様の救いがなりますように」と、神の民の救いをも祈っていたことでしょう。神様はその祈りも聞き入れられた。しかし、ザカリアはその「神様の救いの御業」のために自分が用いられるとは思ってもいなかった。それで、ザカリアは天使ガブリエルの言葉を受け入れることが出来なかつたのでしょう。しかし、祈りというものはかのように、自分が関わっていくことも覚悟の上で捧げられていくべきものなのであります。

3. 沈黙の10ヶ月

さて、ザカリアは10ヶ月の間、口がきけないままでした。それでも、妻エリザベトには聖所で何があったのかは、筆談のような仕方で知らせたのではないかと思います。どうして口がきけなくなったのか、天使はその時、自分に何を告げたのか、ザカリアはつまのエリザベトに知らせたに違いありません。

祭司であったザカリアにとって、また妻のエリザベトにとって、高齢になった妻が身ごもるという出来事によって、旧約におけるアブラハムとサラの間にイサクが与えられた出来事を思い起こしたに違いありません。そして、そのことに思い当った彼らは、与えられた我が子によって、神様の救いの御業が為されることを確信したことでしょう。そして、自分たちが神様の御業に用いられるために選ばれたということに、畏れと光栄とを覚えたことでしょう。ザカリアは口がきけなくなりましたので、夫婦の会話は無くなりました。長く、静かな沈黙の時が流れていきます。その中で、

エリザベトのお腹はどんどん大きくなっています。エリザベトは、自分のお腹が大きくなっていく中で、神様の御業というものを身をもって知らされたことでしょう。そして、ザカリアは神様に強いられた10ヶ月の沈黙の中で、天使ガブリエルが告げた御言葉を、繰り返し繰り返し思い起こしていたに違いありません。10ヶ月は決して短い時間ではありません。最初は、どうして自分が口をきけなくなるような目に遭わなければならぬのかと思ったかもしれません。しかし、沈黙が続していく中で、ザカリアは祭司としての聖書の知識を総動員して、天使が告げた言葉の意味を思い巡らしたに違いありません。そう言えば、アブラハムもサラも子が与えられると告げられたとき、にわかに信じることが出来ずに笑ったな、そんなことを思って苦笑いをしたこと也有ったかもしれません。10ヶ月の沈黙、それは10ヶ月の黙想の時、神様の御言葉を思い巡らすときだったことでしょう。そして、「ついに救い主が来られる。神様の約束が成就する。我が子はそのための道を備える者として立てられ、用いられる。」そう確信しました。

神様の言葉が真実であるということ、本当に本当のことだと知る、それには時間がかかります。1回聞いてすぐに分かるものではありません。しかし、神様の言葉が自分の人生の中で出来事となるとき、神様の真実、神の言葉の真実を少しずつですけれど、本当に分からせていただく。それが私共の信仰の歩みなのでしょう。

4. この子の名はヨハネ

そして、ついに月が満ちて、ヨハネが誕生します。ここからが今朝与えられた御言葉に入ります。当時は、男子が誕生した場合、8日目に割礼を施し、名前をつけることになっていました。近所の人、親戚など集まっています。親戚の人達でしょうか、この男の子の名前はザカリアとしようと決めます。今風に言えばザカリア・ジュニアということになります。子どもの名前は両親がつけるものだと私共は思っていますけれど、当時はそうとは限りませんでした。ザカリアはエリザベトには聖所において何があったのかを知らせていましたけれど、親戚の人や近所の人たちには伝えていなかったのでしょう。ですから、人々は高齢になったエリザベトが身ごもったことは喜びましたけれど、それが「神様が直接介入した驚くべき神の業」とは思っていませんでした。ですから、普通の男の子が生まれたときと同じ対応をしたのでしょう。ザカリアの子どもだからザカリアが良い。そんな感じだったと思います。

ところがこの時、母エリザベトが「いいえ、名はヨハネとしなければなりません。」(1:60)と告げたのです。勿論、これはエリザベトがザカリアから聖所において天使から告げられたことを知らされていたからです。天使は「**その子をヨハネと名付けなさい。**」(1:13)と告げていたからです。しかし、これは中々勇気のいることでした。この名前をつけるという重要なことに、その子の母とはいえ、女性が口を挟むなどということは考えられない時代だったからです。そこで、人々は父であるザカリアに「**この子に何と名を付けたいか**」(1:62)と問うたわけです。ザカリアは口がきけませんので、字を書く板を持ってきて、ザカリアに名前を書かせました。するとザカリアもまた「**こ**

の子の名はヨハネ」（1:63）と書いたのです。つまり、ザカリアは「この子の名はヨハネ」と書いたとき、天使の告げたことを信じて、受け入れたということです。「この子の名はヨハネ」とザカリアが書いたとき、ある意味、ザカリヤは「神様、あなたは真実な方です。私はあなたの御心を信頼して、従っていきます。」という契約書にサインをした、或いは信仰告白をしたということなのではないかと思います。その結果何が起きたでしょう。何とザカリアの口はふたたび開き、そして神様を賛美し始めたのです。10ヶ月間口がきけなかつた人が、突然神様を賛美し始めたのですから、その場にいた人たちは驚きました。ただ事ではないと思ったことでしょう。そして、このことはユダヤの山里中で話題となりました。

ザカリアが口をきけるようになった途端に神様を賛美したということから、この10ヶ月がどのようなものであったかを伺うことが出来るできます。ザカリアは天使が告げた言葉とエリザベトの大きくなっていくお腹、つまり神様の言葉と神様のなされた出来事に思いを集中し、神様の御心に思いを巡らしていたのでしょう。そのために神様はザカリアにこの沈黙の時を与えられたのでしょう。信じない者から信じる者に変えられるために、必要な時として与えられました。

ちなみに、この「ヨハネ」という名前は「神は哀れみ深い」という意味です。

5. ザカリアの賛歌①

67節以下の所に対して、「ザカリアの預言」という小見出しが付いています。しかし、68節以下のザカリアの言葉は、最初の言葉のラテン語をとて「ベネディクトゥス」と呼ばれて、毎日の「朝の祈り」の時に唱えられるほどに、教会でとても重んじられてきました。このベネディクトゥスという言葉は「誉め讃えられよ」とか「ほむべきかな」という言葉ですから、古くから「ザカリアの賛歌」と呼ばれてきました。このザカリアの賛歌の中で、洗礼者ヨハネについて語られている所は多くありません。76節と77節だけです。ここでザカリヤは、単純に我が子が生まれたということを喜んでいるではありません。そうであるならば、我が御子ヨハネについてもっと多くが語られることでしょう。しかし、ザカリヤがここで歌っているのは、神様の救いの御業が始まるのがはつきり分かった、いやもう既にここに始まっている。我が子ヨハネが生まれたのは、そのことの明らかにした。何と素晴らしいことかとザカリアは歌っているわけです。

ザカリアの賛歌は、68～75節と76～79節に分けられます。順に見ていきましょう。

6. ザカリアの賛歌②

まず前半の68節～75節は、「イエス様が救い主として神様によって遣わされ、救いがもたらされる」ということが歌われています。

「1:68 ほめたたえよ、イスラエルの神である主を。」で始まります。どうして主を誉め讃えるのかと言えば、主がその民イスラエルを解放してくださるからです。「主はその民を訪れて解放し、1:69 我らのために救いの角を、／僕ダビデの家から起こされた。」ここで使われている「救いの角」という言葉ですが、旧約以来、聖書では力の象徴として「角」（これは牛の角のこと）が用いられて

いますので、「救いの角」というのは、「大きな力あるお方」ということです。それが「ダビデの家から起こされた」と歌う。これは、明らかに後に生まれるイエス様を指しています。注目すべきは、このことが過去形で記されていることです。神様の預言は「過去に起きたことと同じほど確実に起こる」。だから、過去形で記されているわけです。これは「預言的完了形」と呼ばれます。旧約の預言書などでも使われています。

そのイエス様の到来は、旧約の預言者達が預言していたことだ。その時が来た。自分たちはこの方によって、敵の手から救い出されると歌います。敵というのは、具体的な自分に敵対する者とも理解できますし、私共を捕らえる悪しき力や諸々の靈力・サタンと受け止めることも出来ます。これが「**1:70 昔から聖なる預言者たちの口を通して／語られたとおりに。 1:71 それは、我らの敵、／すべて我らを憎む者の手からの救い。**」と歌われていることです。

そして、その救いの御業はアブラハム以来の神様がイスラエルと結ばれた契約に基づくというのです。それが「**1:72 主は我らの先祖を憐れみ、／その聖なる契約を覚えていてくださる。 1:73 これは我らの父アブラハムに立てられた誓い。**」ザカリアは、聖靈なる神様の導きによって、我が子ヨハネの誕生によって始まっていく神様の救いの出来事を、長い長い神の民の歴史の中で受け止めて、神様を讃め讃めているわけです。これが神様によって与えられた視点です。私共は自分の目の前のことしか見えませんが、神様は歴史の全てをお見通しです。神様の御業に目が開かれるとき、私共にはこの長い神様のご計画による歴史を俯瞰する視点が与えられるのでしょうか。

その救いの御業によって救いに与った神の民はどうなるのか。それが74.75節です。「**1:74 敵の手から救われ、／恐れなく主に仕える、 1:75 生涯、主の御前に清く正しく。**」「敵の手から」、これは先ほど申し上げたように、具体的な敵とも理解できますし、私共を神様から引き離そうとする様々な悪しき力や惡靈と理解しても良いでしょう。大切なことは、ここで「恐れなく主に仕える」ということと「生涯、主の御前に清く正しく」生きる者となるということです。「恐れなく」です。神様が守り、支え、導いてくださるのですから、何も恐れることはありません。まことに自由な者として生きる。しかしそれは自分勝手、わがままということではなくて、「神様の御前に清く正しく生きる」者としてです。それが、イエス様に救われた者の歩みとなるとザカリヤは聖靈に満たされて告げたわけです。

そして、そのような救いの御業を為すために救い主イエス様を与えてくださる神様を、ザカリアは讃め讃めないではおれなかったということです。

7. ザカリアの賛歌③

後半を見てみましょう。我が子ヨハネについては、どう告げたでしょうか？76.77節「**1:76 幼子よ、お前はいと高き方の預言者と呼ばれる。主に先立って行き、その道を整え、1:77 主の民に罪の赦しによる救いを／知らせるからである。**」実際にザカリヤは、我が子ヨハネは将来預言者として歩むこと。そして、我が子ヨハネは救い主の為に道を備え、罪の赦しによる救いを知らせることにな

る。そこまで聖霊なる神様によって知らされたわけです。そして、神様を讃め讃えました。

ここでヨハネは「**いと高き方の預言者**」と言われています。一方、イエス様は何と呼ばれているか言いますと「**いと高き方の子**」（ルカ 1:32）と御使いガブリエルによって呼ばれています。これは明確な違いです。ヨハネはあくまでも預言者です。しかし、イエス様は神の御子です。ヨハネは唯一救い主を見て、「この方が救い主・メシアです」と指示することが出来たただ独りの預言者です。ヨハネ以外の旧約の預言者は全て、イザヤしてもエレミヤにしても、やがて来られるキリスト・イエスを指示しました。しかし、ヨハネはイエス様を救い主として指示することが出来た唯一の預言者です。その意味で、ヨハネは旧約と新約との狭間に立つ預言者と言って良いでしょう。彼が旧約と新約を繋いでいます。

8. ザカリアの賛歌④

そして最後に、ザカリアはヨハネの誕生そして救い主の到来によってもたらされる神様の救いをこう告げました。78. 79 節「**1:78 これは我らの神の憐れみの心による。この憐れみによって、／高い所からあけばの光が我らを訪れ、 1:79 暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、／我らの歩みを平和の道に導く。**」と告げました。神様の憐れみによって、失望・嘆き・悲しみ・不安・罪・死の暗闇にいる者たちの上に朝日が昇るように、生きる力と希望と勇気を与え、御国に向かつての道を導かれて行く。そして、このイエス様の光に照らされて歩む者は「平和の道」を歩みます。「平和への道」ではありません。「平和の道」です。この道を歩んでいけば、やがて平和が訪れるという道ではありません。その道を歩む者は、既に主の平和、イエス様が与えてくださる平和の中に生きる。私共に与えられているのは、この「キリストの平和の道」です。まことにありがたいことです。

ただ今から、聖餐に与ることになります。この聖餐は、私共が「主の平和の道」を歩む上でなくてはならない靈の糧です。目に見える御言葉としての聖餐と見えない御言葉としての説教に養われて、健やかに「主の平和の道」歩んでまいりたいと願います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

アドベント第2の主の日、洗礼者ヨハネの誕生の出来事とザカリアの賛歌を通して、私共に親しく語りかけてくださいましたこと、感謝いたします。あなた様の救いの御手の中で生かされ、平和の道を歩む私共です。どうか、私共の唇にもあなた様を讃め讃える賛美を備えてくださいますように。あなた様が与えてくださったイエス様の十字架の出来事を無駄にすることはありませんように、全ての惡しき靈、惡しき力から私共を守ってください。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン